



Fore Please /
世界ゴルフ

識聞録

ゴルフビジネスのプロが30年以上回って見て聞いて感じた世界のゴルフ文化をお伝えするコーナー。第18回はマスターズのテレビ中継についてのお話です。

マスターズの生中継は 世界でも日本が初めて。

今年のマスターズはジョージン・スピースの優勝で幕を閉じましたが、私が代表を務める会社にとっては、TBSと共に生放送を開始してから40回目となる記念すべき大会でした。それまでは編集した番組を1週間後に放映していましたが、生中継元年となった1976年大会ではレイ・フロイドの優勝をリアルタイムで日本にお届けしました。意外なことかもしれませんが、このマスターズの生中継は世界でも日本が初めてで、イギリスのBBCでさえ、生中継は80年代になってからなのです。

今や、海外のスポーツ番組をテレビやネットを通じて生で観る事が常識ですが、当時は何から何までが初めての事で大変でした。

現在の中継は光ファイバーを使った海底ケーブルをデジタル信号として画像や音声を日本に伝送していますが、最初の頃は「衛星中継」と称して赤道上空35・786キロ上空の静止軌道にある通信衛星を使って中継していました。オーガスタからの映像はいったんニューヨークに地上回線で伝送され、東海岸の大きなパラボラのある衛星施設からアメリカの国内衛星を使って、西海岸で一旦受けます。その後太平洋上にある通信衛星に乗せて最後に茨城県にある当時の国際電信電話会社(KDD)の地上局で受け、それを東京のTBSに送り全国ネットで放送

してました。衛星も分単位での利用料となるために、放送開始ギリギリまで日本に繋がずに、オーガスタの映像がどこまで行っているか各中継地点の担当者で電話連絡をしながら確認したり、カラーバーと呼ばれる調整用の画像を送ったり、日本側での確認が取れるまで現地では緊張の時間が続きました。

光ファイバーケーブルが 地下に埋められている。

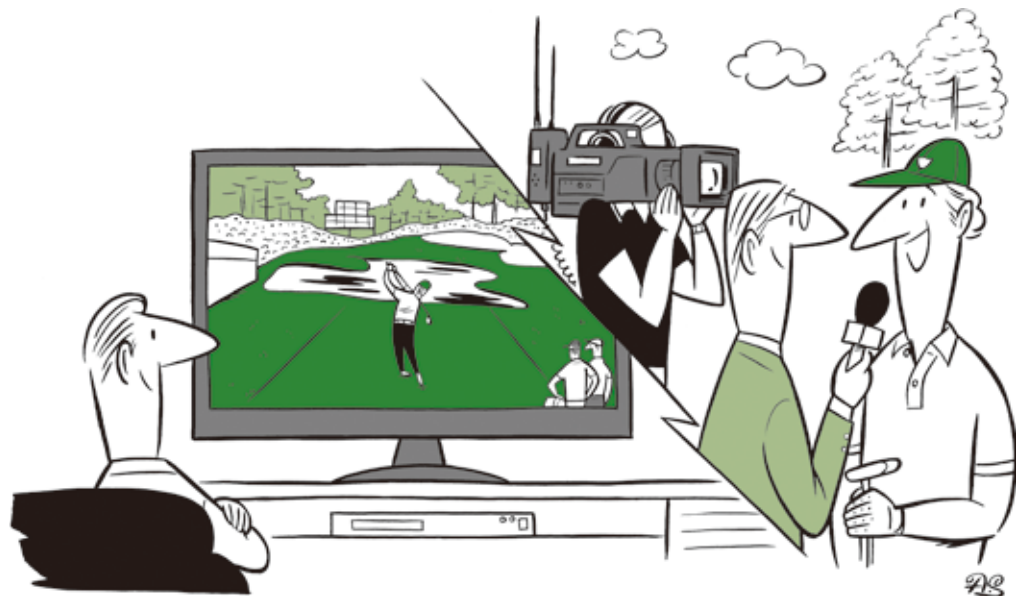
宇宙に向けて2回も飛んでいった画像ですから、実際に日本で見ると数秒の遅れが生じました。今でもニュース番組などで、海外のレポーターに日本から呼びかけて、少しタイミングがズレて反応が返ってくる事があると思いますが、まさにああいう感じでした。トラブルで音声だけ海底ケーブルを使って画像より先に日本に着いてしまいうような事もあり、ショットの音とタイミングが同期していなかった事もありました……。

現場での制作も当初はアメリカの放送局のCBSが作った画像をそのままもらって、現地の簡単なスタジオでその画像を見ながら日本語の実況と解説を入れていました。アメリカ向けに作られている画像だけに、現地のアナウンサーの顔が出てきたり、コマシーシャルが入ったりするハプニングもありましたので、日本でコントロールする方の焦った顔が目につかびます。

Vol.18

テレビ中継

マスターズが誇る 世界最高峰の中継技術



世界的なイベントであるマスターズは200カ国以上の国で放送されています。現地では立派な中継施設やスタジオも作られており、TBSの制作担当の方も現地での打ち合わせを重ねて計画を立て、中継車もアメリカで用意して万全の体制で行っています。私の知る限り、世界のスポーツイベントの中継施設としても五輪やW杯に並ぶ最高峰だと思います。

マスターズは常に最高の映像技術やアイデアを導入するだけでなく、ほかのトーナメント会場ならフェアウェイ上にあるカメラ用のケーブルや最新の光ファイバーケーブルなども地下に埋められており、カメラスタンドなどもきれいにグリーンで塗装され、コース全体が中継のために改造されている徹底ぶりです。

衛星生中継から始まり、ハイビジョンや3Dの試験放送、インターネットでの中継や4K画像にとどまらず、今後も日本の皆さんがびっくりするような中継をお届けできると思いますので、これからのマスターズを楽しみにしてください。

ゴルフビジネスの プロフェッショナル

神野方仁 (じんの・みちひと)
1956年生まれ。テレ・ブランニング・インターナショナル株式会社・代表取締役社長。国内外の様々なスポーツビジネスに関わり、中でもゴルフはマスターズのようなメ



ジャー大会からジュニアゴルフに至るまで、イベント、放送、広告、マーケティングなどの面に長年携わっている。日記を公開中 Fast Track Michi's Diary:
www.tpi-j.co.jp/diary/index.html

イラスト/ソリマチアキラ